

顎骨嚢胞521症例の臨床的検討

鈴木君弘, 星名由紀子, 中島民雄

新潟大学歯学部口腔外科学第一講座

(主任: 中島民雄教授)

(受付: 平成9年5月29日; 受理: 9年6月6日)

Clinical Analysis of 521 Jaw Cysts

Kimihiro Suzuki, Yukiko Hoshina and Tamio Nakajima

First Department of Oral Maxillofacial Surgery, School of Dentistry, Niigata University

(Chief: Prof. Tamio Nakajima)

(Received on May 29, 1997; Accepted on June 6, 1997)

Key words : jaw cysts (顎骨嚢胞), Fukushima and Ishiki's classification (福島・石木の分類)**Abstract** : Incidence, sex, age, chief complaint and location of 521 histologically confirmed jaw cysts treated in the First Department of Oral and Maxillofacial Surgery were studied using the classification proposed by Fukushima et al.

Radicular cysts showed the highest incidence (49.3%), which was followed, in order of frequency, by postoperative maxillary cysts (20.7%), dentigerous cysts (13.0%), primordial cysts (10.8%), nasopalatine duct cysts (3.8%) and simple bone cysts (2.3%). The male to female ratio was 1.6 : 1 and with the exception of simple bone cysts, the male predominance was observed in all cysts. The peak incidence was in the 4th decade and 75% of the population were in the 3rd to 6th decades. Local swelling was the most common chief complaint. Swelling and/or pain accounted for 83.6% of the complaints, but the cysts were asymptomatic and discovered radiographically in 24% of the patients. The site of predilection was the maxillary incisal region (39.4%), which was followed by the maxillary molar region (29.9%), mandibular molar region (24.7%) and the mandibular incisal region (6.1%).

The classification proved to be quite useful for the analysis of jaw cysts.

抄録: 第一口腔外科を受診し病理組織学的に確認できた521例の顎骨嚢胞について, その頻度・性・年齢・主訴・部位について検討した。

歯根嚢胞 (49.3%) が最も多く, 以下, 術後性上顎嚢胞 (20.7%), 含歯性嚢胞 (13.0%), 原始性嚢胞 (10.8%), 鼻口蓋管嚢胞 (3.8%), 単純性骨嚢胞 (2.3%) であった。男女比は1.6 : 1で, 単純性骨嚢胞以外のすべての嚢胞で男性が多かった。30才代が最も多く, 20才代から50才代までで全体の75%を占めた。主訴では腫脹が最も多く, 腫脹, 疼痛またはその両者の合計は患者の62.4%であり, 症状のなくレントゲン写真によって指摘されたのは24%であった。発生部位は, 上顎前歯部 (39.4%), 上顎臼歯部 (29.9%) 下顎臼歯部 (24.6%) 下顎前歯部 (6.1%) の順であった。

この分類は, 顎骨嚢胞の分類にきわめて有用であった。

緒 言

顎骨嚢胞は口腔外科臨床において, 遭遇する機会の多い疾患であるにも関わらず, その分類に関しては意見の分れるところが多い。それは, 分類基準が発生由来・発

生部位・組織パターンなどと様々であり, 統一されていないことが原因と考えられる^{1,2)}。

1985年, 当時本学口腔病理学講座の福島・石木¹⁾は, 当科における成人の顎骨嚢胞の臨床病理学的検索結果をもとに, 統一した基準による新分類を提唱した (表1)¹⁾。この分類は, 由来上皮が顎骨中存在するもののみを対象

表1 福島ら¹⁾による顎骨嚢胞の新分類

由来上皮	嚢胞名	亜分類
歯原性嚢胞 (マラッセ残存上皮)	a. 歯根嚢胞	a-1. 炎症型歯根嚢胞 a-2. 遷延型歯根嚢胞
(退縮エナメル上皮)	b. 含歯性嚢胞	b-1. 含歯性嚢胞 b-2. 萌出嚢胞
(歯堤・マラッセ残存)	c. 原始性嚢胞	c-1. 角化嚢胞 c-2. 非角化嚢胞
非歯原性嚢胞 (鼻口蓋管上皮) (洞粘膜上皮) 偽嚢胞 (なし)	a. 鼻口蓋管嚢胞 b. 術後性上顎嚢胞	
	a. 単純性骨嚢胞 b. 脈瘤性骨嚢胞 c. 静止性骨空洞	

とした病理組織学的分類であり、その特徴は、原始性嚢胞の亜分類として角化嚢胞（歯原性角化嚢胞）と非角化嚢胞をもうけたこと、球状上顎嚢胞、正中口蓋嚢胞、正中下顎嚢胞などの顔裂嚢胞の存在を否定したこと、外国には極めて稀な術後性上顎嚢胞が入っていること、石灰化歯原性嚢胞を嚢胞性病変から除外したこと、鼻涙管由来と考えられる鼻涙管嚢胞は発生部位が顎骨内でないため外したことなどである。なお、上皮のないものとして単純骨嚢胞、脈瘤性骨嚢胞、静止性骨空洞は従来の分類と同様、偽嚢胞として入れてある。今回我々は、この新分類に基づいて、過去10年間に経験した顎骨嚢胞について、臨床的検討を行ったので報告する。

対象および方法

1984年4月から1994年3月までの10年間に、新潟大学歯学部第一口腔外科外来にて治療し、病理組織検査を行った顎骨嚢胞571例のうち、炎症反応が強く分類不能の50例を除いた521例を対象として、発生頻度、性別、年齢、発生部位について検討した。発生部位については、上顎と下顎、前歯部と臼歯部に分け、後者には小臼歯部から下顎枝部までを含めた。摘出物の病理診断は本学口腔病理学講座でおこなったもので、福島らの分類にしたがって分類した。

結 果

1. 嚢胞別発生頻度

嚢胞別の症例数は、歯根嚢胞が257例(49.3%)と最も多く、以下、術後性上顎嚢胞108例(20.7%)、含歯性嚢胞68例(13.0%)、原始性嚢胞(10.8%)、鼻口蓋管嚢胞

表2 嚢胞別症例数

	症例数	男性	女性	平均年齢
歯根嚢胞	257 (49.3%)	154	103	39
含歯性嚢胞	68 (13.0%)	49	19	36
原始性嚢胞角化嚢胞	32 (6.2%)	22	10	31
非角化嚢胞	24 (4.6%)	15	9	44
鼻口蓋管嚢胞	20 (3.8%)	14	6	44
術後性上顎嚢胞	108 (20.7%)	65	43	48
単純性骨嚢胞	12 (2.3%)	5	7	28
脈瘤性骨嚢胞	0 (0.0%)			
静止性骨空洞	0 (0.0%)			
計	521	324	197	40

20例(3.8%)で、偽嚢胞として単純性骨嚢胞の12例(2.3%)があるのみであった(表2)。

2. 性別と年齢

嚢胞全体の性別は、男性324人、女性197人と1.6:1の割合で、男性に多かった(表2)。また、年齢分布では、30才代が最も多く、20才代から50才代までで全体の75%を占めていた(図1)。

これを嚢胞別に検討してみると、歯根嚢胞では、性別は男性が女性の1.5倍で、年齢は20才代30才代に多く、50才代40才代がこれに続いていた(表2, 図2)。含歯性嚢胞の性差はさらに大きく、男女比は2.5:1であった(表2)。年齢分布は10才代と50才代にピークを認め、両者とも下顎臼歯部に発生するものが多かった(図3)。原始性嚢胞も、角化型、非角化型いずれも男性に多く、全体では男性が女性の2倍であった(表2)。年齢は10才代にピークを認め、年齢の増加と共に減少していた(図4)。鼻口蓋管嚢胞は20例と数が少なかったが、やはり男性に

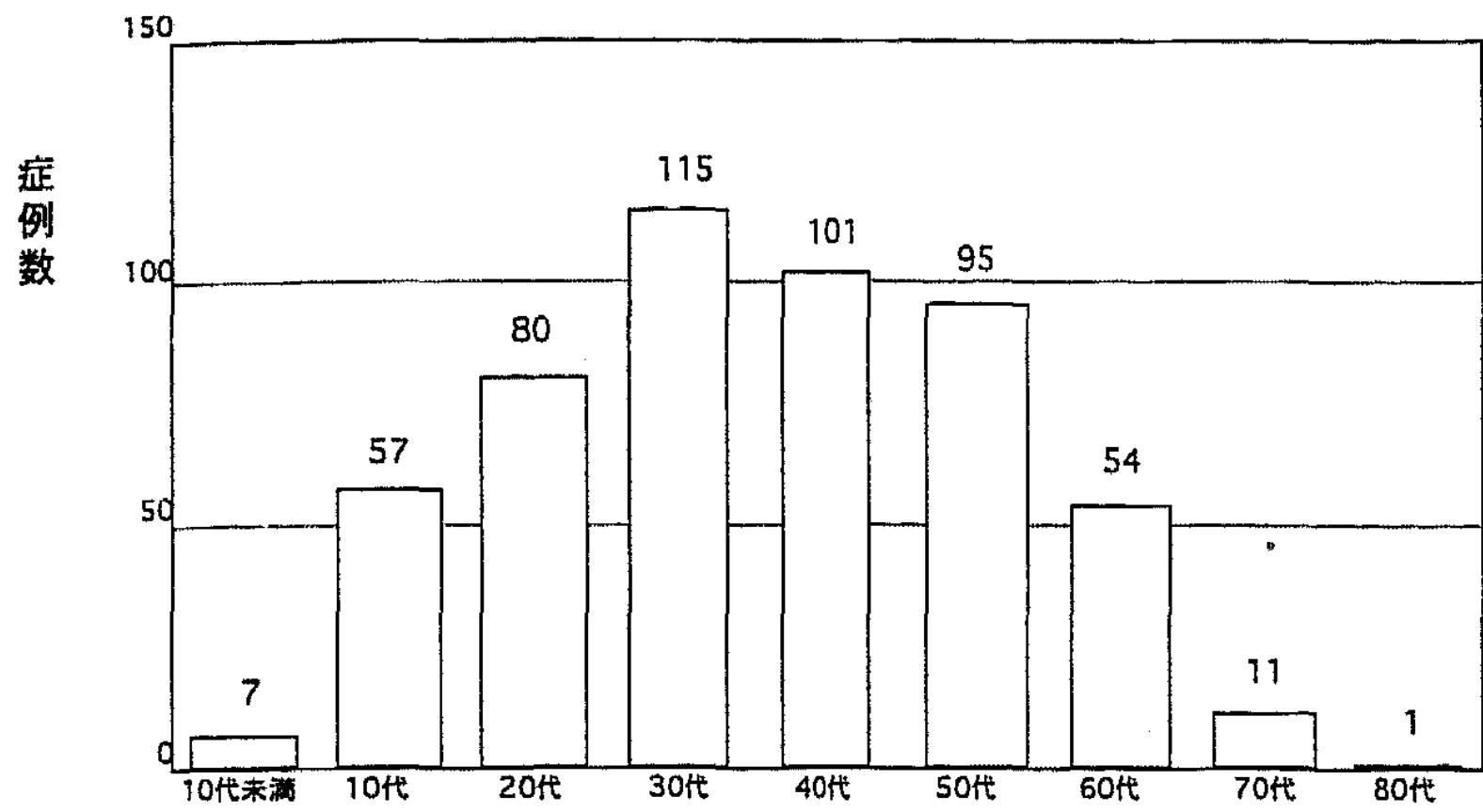


図1 年齢分布

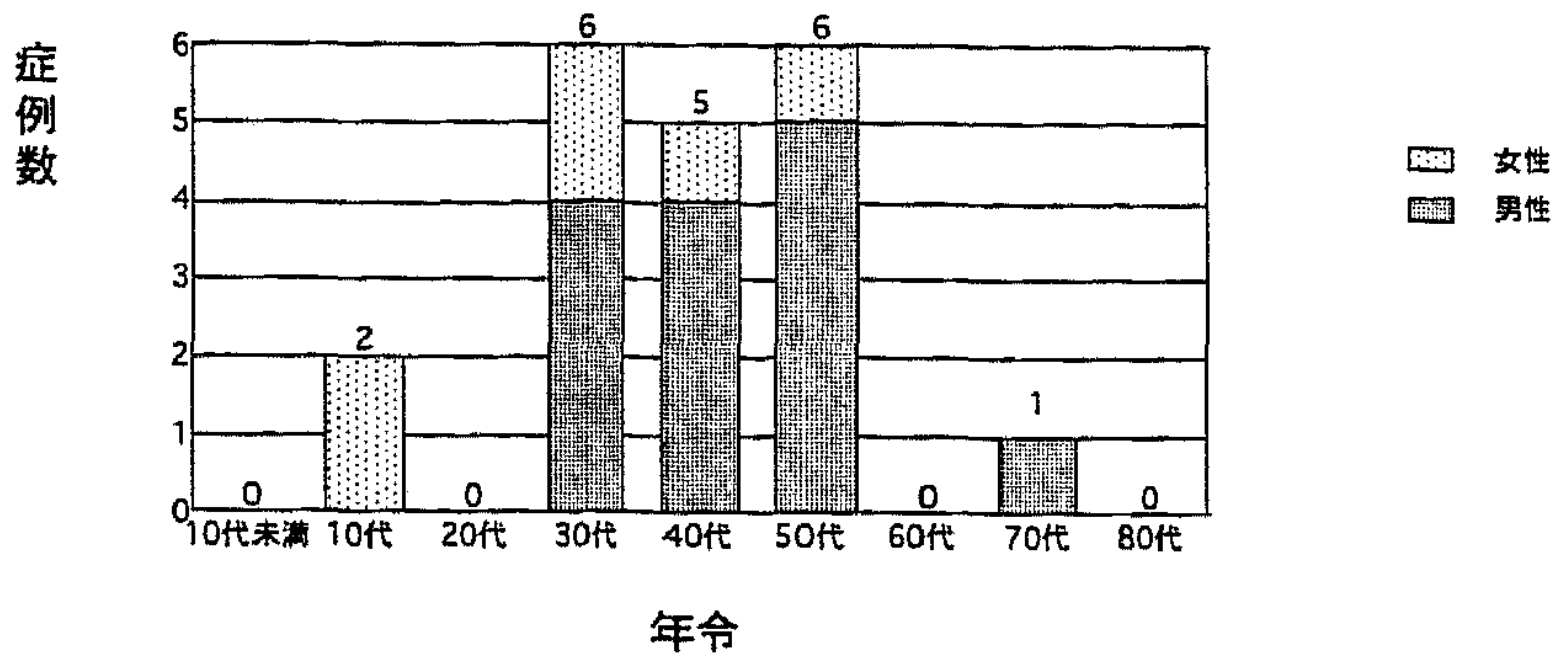


図5 鼻口蓋管嚢胞の年齢・性別

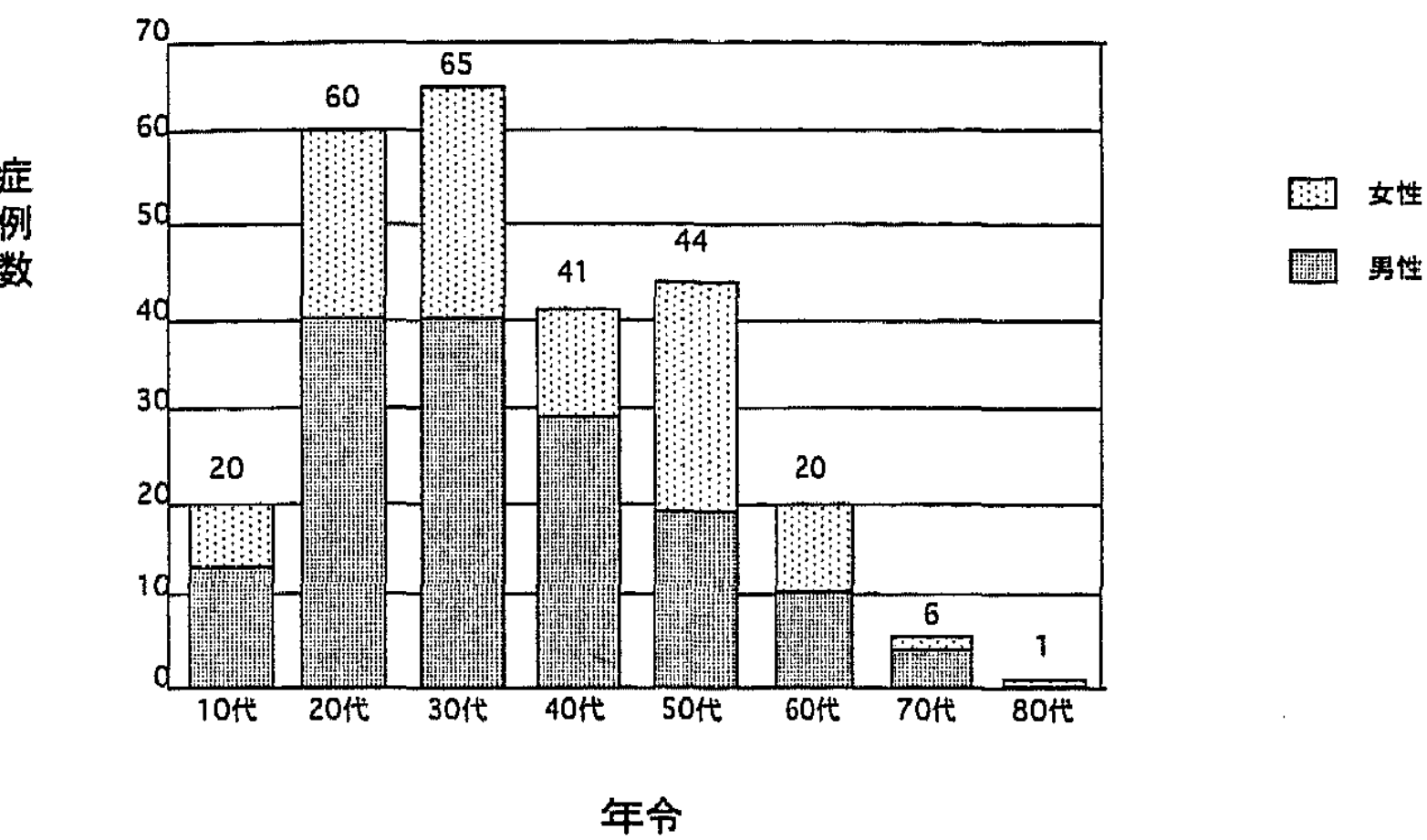


図2 歯根嚢胞の年齢・性別

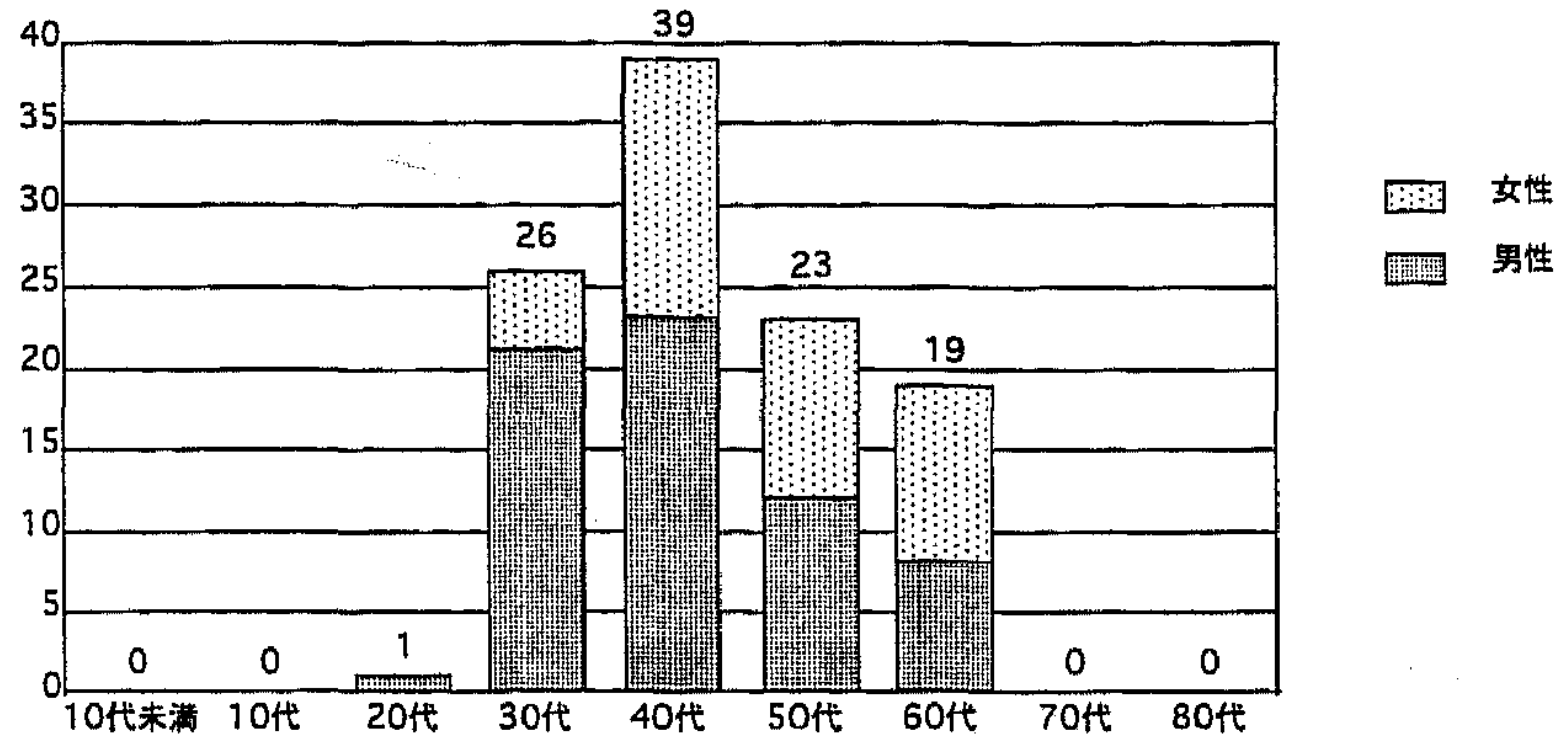


図6 術後性上顎嚢胞の年齢・性別

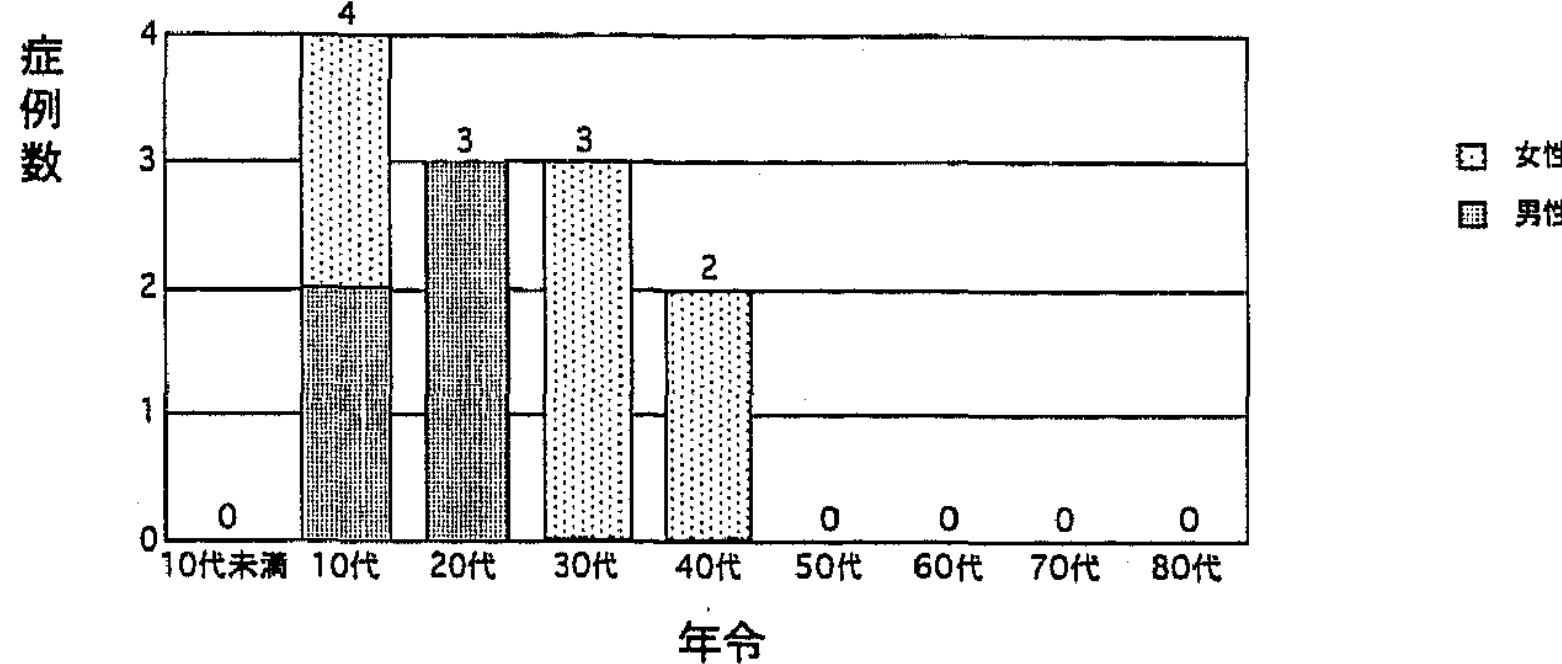


図7 単純性骨嚢胞の年齢・性別

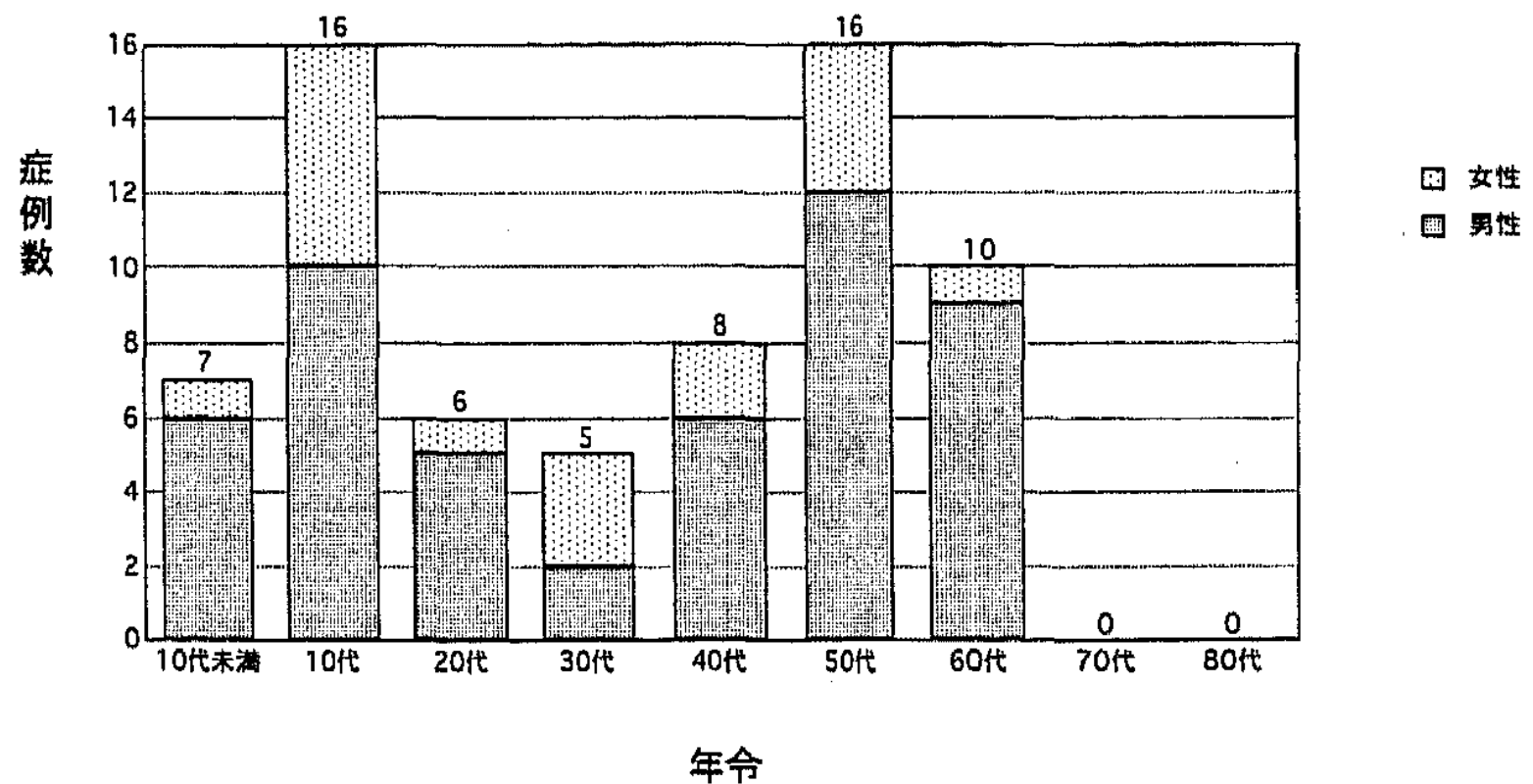


図3 含歯性嚢胞の年齢・性別

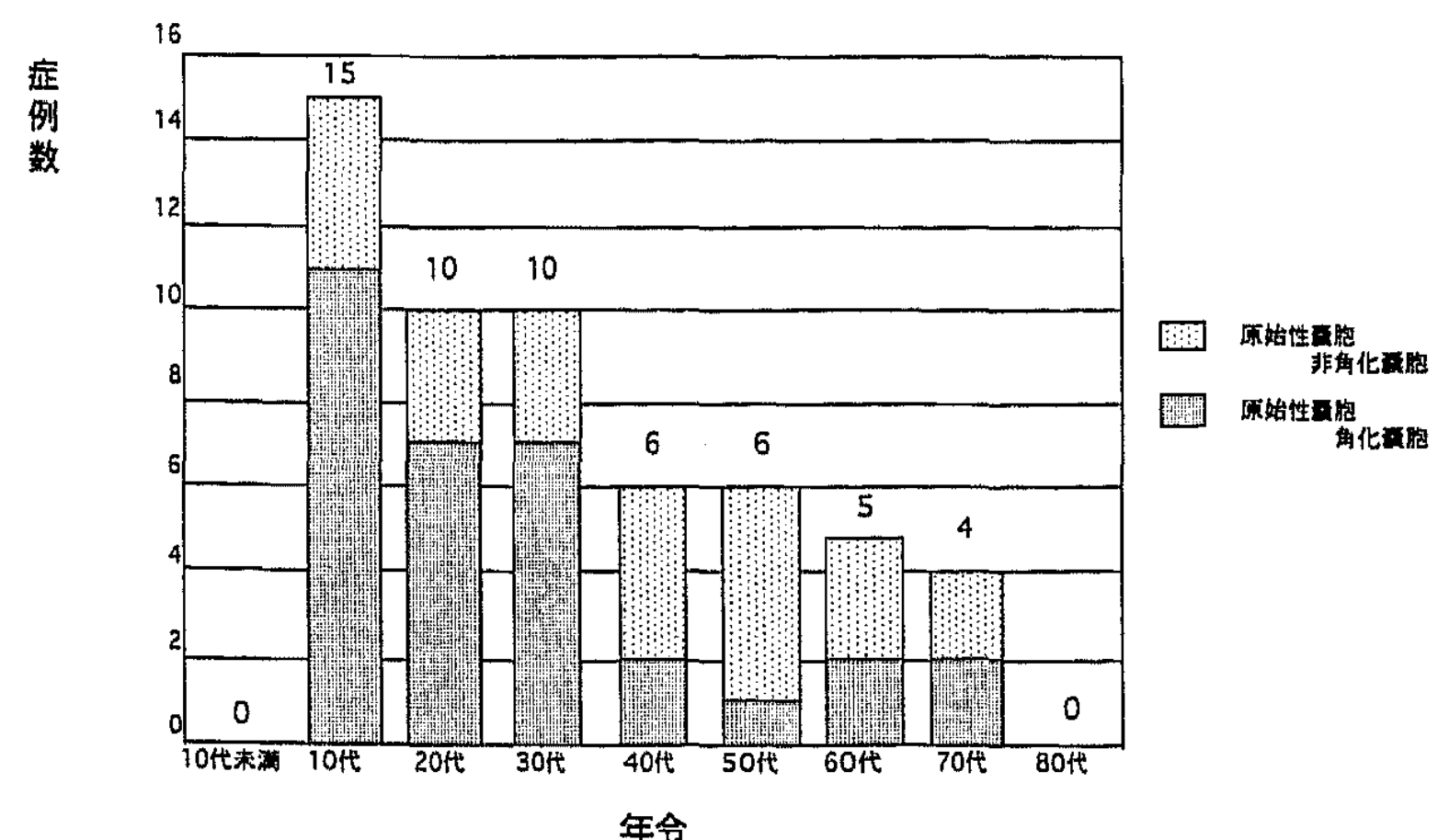


図4 原始性嚢胞の年齢

多く、年齢分布では、30才代から50才代に集中してた(表2, 図5)。術後性上顎嚢胞は、性別は男性が女性の1.5倍で、年齢では、20才代まではほとんどなく、40才代をピークに30才代から60才代にわたっていた(表2, 図6)。単純性骨嚢胞は症例数が少なかったためはっきりとしたことは言えないが、性別では、他の嚢胞と異なり女性にやや多かった(表2)。年齢は10才代が最も多かったが、比較的年齢の高い40才代にも見られた(図7)。

3. 主 訴

カルテに記載のない17例を除く504例中最も多かった初診時の主訴は腫脹の145例(28.7%)で、無症状でレントゲン写真で発見されたもの120例(23.8%), 腫脹と疼痛101例(20.0%), 疼痛69例(13.7%)などがこれに続いており、排膿や違和感はそれぞれ24例(4.8%)と20例(4.0%)と少なかった(図8)。嚢胞別にみると、原始性嚢胞角化嚢胞、単純性骨嚢胞以外の嚢胞では、腫脹か疼痛のいずれか、あるいは両方がほぼ半数以上を占めたが、原始性嚢胞非角化嚢胞、単純性骨嚢胞では、無症状でレントゲン写真撮影により偶然発見されたものが多かつ

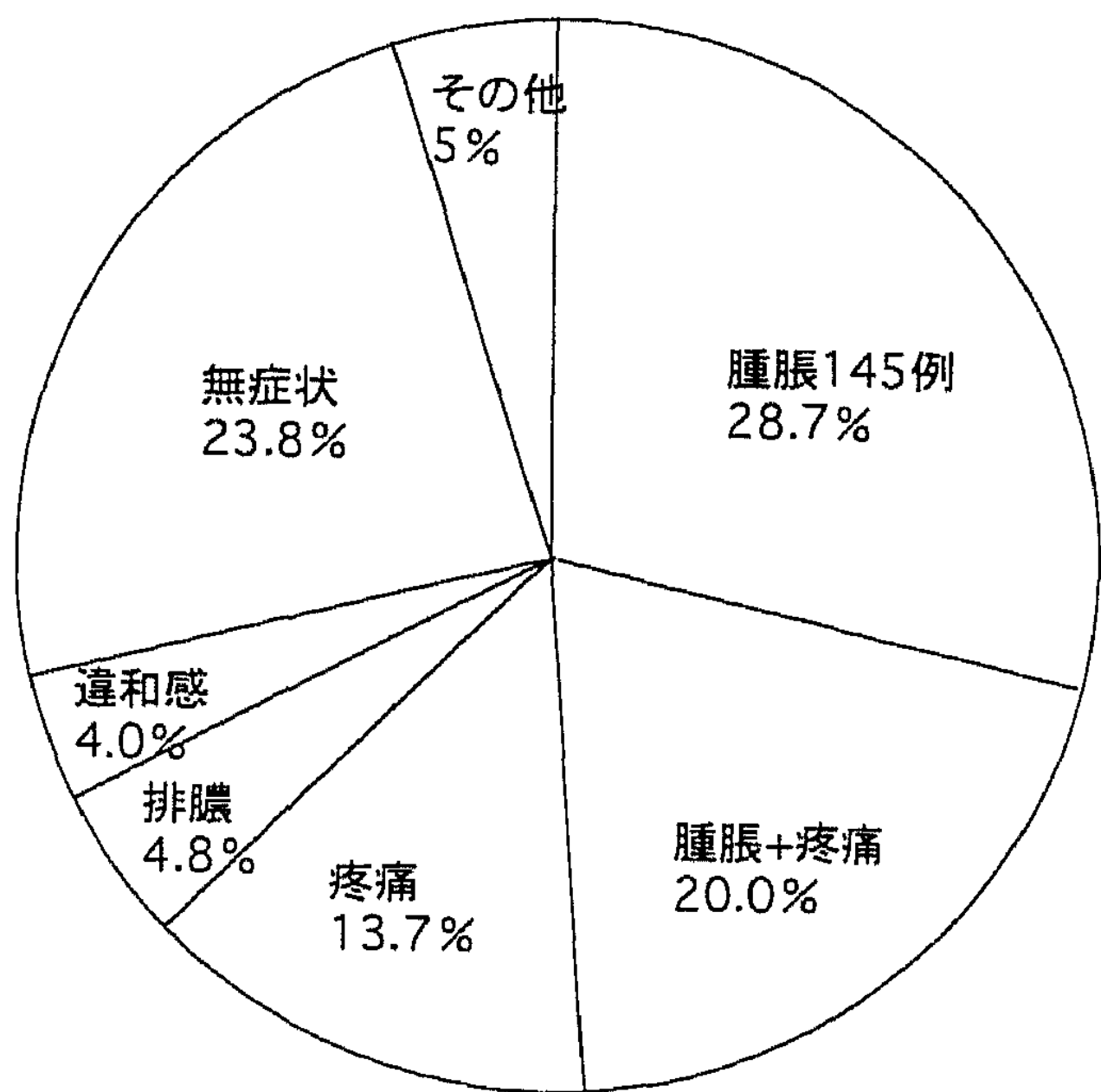


図8 初診時の主訴

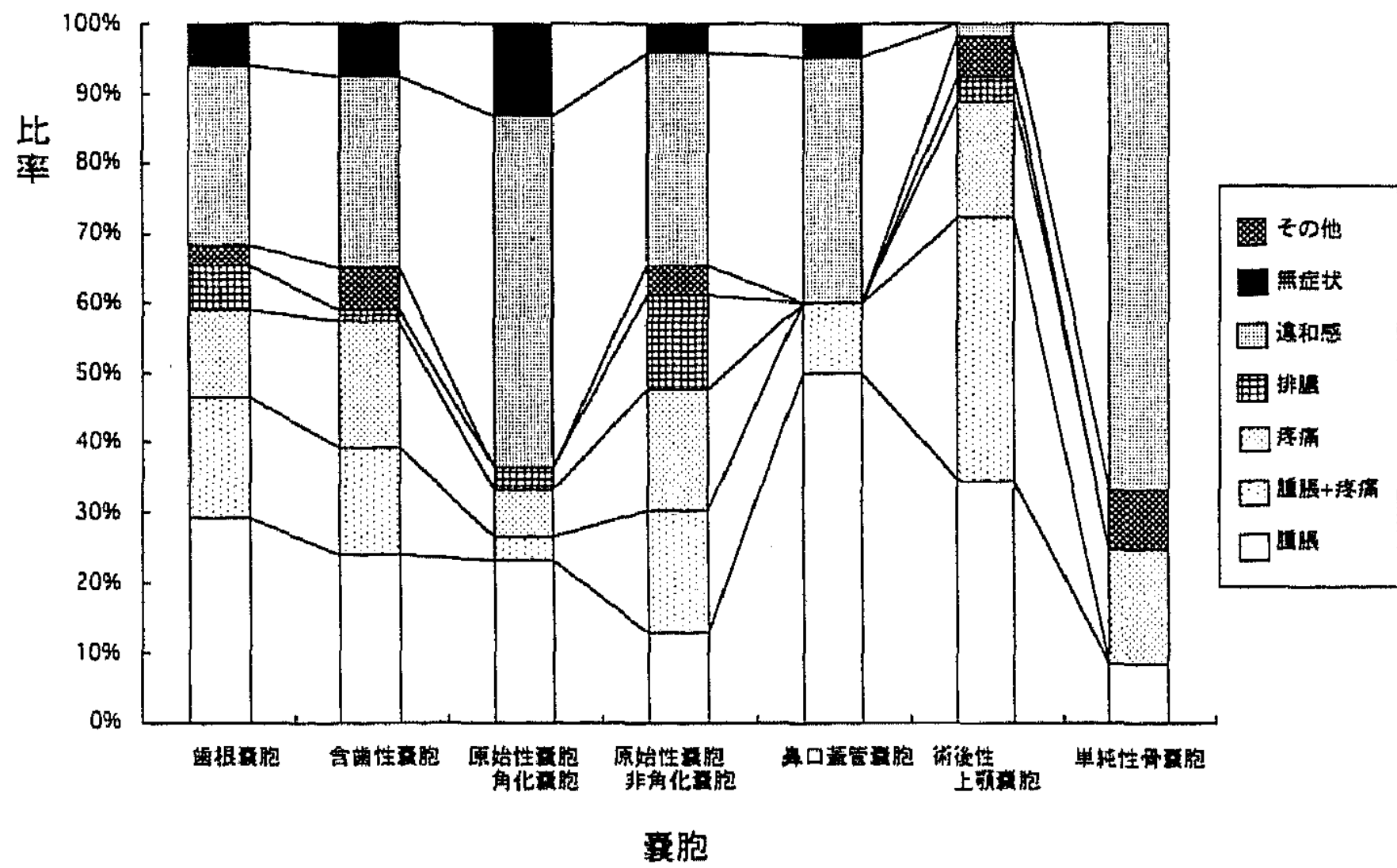


図9 嚢胞別主訴比率

た(図9)。

4. 発生部位

発生部位が明確でない症例が12例あり、また2部位にわたって発生した症例が12例あったため、発生部位明確例は521例であった。この521例の発生部位別症例数についてみると、上顎361例(69.3%)、下顎160例(30.7%)で、上顎のほうが下顎より2倍以上多かった。上顎では、前歯部が205例と臼歯部156例より多く、このうちの75.1%は歯根嚢胞であった。ほかに鼻口蓋管嚢胞9.8%、含歯性嚢胞8.8%などがあった。一方、臼歯部では、術後性上顎嚢胞が71.8%と最も多く、歯根嚢胞は17.9%で、これに原始性嚢胞7.1%が続いていた。これに対して、下顎では、前歯部が32例と非常に少なく、その内訳は歯根嚢胞53.1%、原始性嚢胞25.0%、含歯性嚢胞15.6%などであった。臼歯部は128例あり、歯根嚢胞43.0%、含歯性嚢胞31.2%、原始性嚢胞20.3%の順であった(表3)。

さらに、発生部位が限定される鼻口蓋管嚢胞と術後性

表3 発生部位別頻度

	前歯部		臼歯部	
	上顎	75.1%	歯根嚢胞	17.9%
	8.8%	含歯性嚢胞	2.6%	
	5.4%	原始性嚢胞	7.1%	
	9.8%	鼻口蓋管嚢胞		
		術後性上顎嚢胞	71.8%	
	0.9%	単純性骨嚢胞	0.6%	
		205例	156例	
下顎	32例		128例	
	53.1%	歯根嚢胞	43.0%	
	15.6%	含歯性嚢胞	31.2%	
	25.0%	原始性嚢胞	20.3%	
	6.3%	単純性骨嚢胞	5.5%	

表4 歯根嚢胞の部位別症例数

	前歯部	臼歯部
上顎	154 (60.6%)	28 (11.0%)
下顎	17 (6.7%)	55 (21.7%)

部位不明 8例
部位併発 5例

表5 含歯性嚢胞の部位別症例数

	前歯部	臼歯部
上顎	18 (26.9%)	4 (6.0%)
下顎	5 (7.4%)	40 (59.7%)

部位不明 2例
部位併発 1例

表6 原始性嚢胞角化嚢胞の部位別症例数

	前歯部	臼歯部
上顎	3 (9.4%)	5 (15.6%)
下顎	6 (18.7%)	18 (56.3%)

部位不明 1例
部位併発 1例

表7 原始性嚢胞非角化嚢胞の部位別症例数

	前歯部	臼歯部
上顎	8 (33.3%)	6 (25.0%)
下顎	2 (8.4%)	8 (33.3%)

表8 単純性骨嚢胞の部位別症例数

	前歯部	臼歯部
上顎	2 (16.7%)	1 (8.3%)
下顎	2 (16.7%)	7 (58.3%)

上顎嚢胞を除いた嚢胞について嚢胞ごとに分析してみると、歯根嚢胞では、上顎前歯が60.6%と最も多く、逆に下顎前歯部は6.7%と最低であった(表4)。含歯性嚢胞は下顎臼歯部が59.7%と最も多く、26.9%の上顎前歯部がこれに続いており、下顎前歯部と上顎臼歯部はいずれの10%未満と低かった(表5)。原始性嚢胞のうちの角化嚢胞は臼歯部が多かったが、非角化嚢胞では、下顎前歯部に少ない以外好発部位は認められなかった(表6, 7)。単純性骨嚢胞は下顎臼歯部が最も多かった(表8)。

考 察

顎骨嚢胞の分類に関しては非常に多くのものが提唱されてきたが、いまだに統一した見解は得られていない。そこで、当科の横林と口腔病理講座の福島が中心となって、顎骨中に由来上皮の存在する顎骨嚢胞の臨床病理組織学的検索を行い、その結果提案されたのが今回の分類である¹⁾。

この分類では、歯原性角化嚢胞と歯を有しない歯原性非角化嚢胞を原始性嚢胞として一括している。従来、原始性嚢胞は硬組織形成前の歯胚上皮から発生する無歯性の濾胞性歯嚢胞として分類されていた²⁾。一方、歯原性角化嚢胞は角化した被覆上皮を持つ嚢胞で、その組織学的特徴から命名されたものである⁴⁾。原始性嚢胞の多くは角化嚢胞であり、その由来上皮は歯原性上皮であることから、世界的には両者を同一視する見解が一般的になっている^{5,6)}。しかし、今回の症例からもわかるようであり、原始性嚢胞のすべてが角化嚢胞と言うわけではないので、本分類では、原始性嚢胞に角化型と非角化型の亜分類をもうけている⁷⁾。

顔裂性嚢胞は胎生期の各突起癒合部の上皮が迷入するために発生するとされていた。しかし、鼻口蓋管嚢胞は鼻口蓋管上皮由来の嚢胞で、顔裂性由来ではない。また、口蓋突起癒合部には、一時的に上皮の残遺することがあるが、自然消失するため、成人の骨内には存在せず、正中口蓋嚢胞とされていたものは、鼻口蓋管嚢胞としてならん問題は無い。球状上顎嚢胞や正中下顎嚢胞が発生するとされていた部位では、各突起はmergingにより癒合するので、発生学的には顔裂性由来を示唆するような上皮の陥入は証明されない。また、顎裂部は上顎中切歯と側切歯間あるいは側切歯部が90%以上で、球状上顎嚢胞が発生するとされている側切歯と犬歯間のものは6%にしかすぎない⁸⁾。したがって、これらの嚢胞も顔裂性は考えにくい。病理組織学的には、ほかの部位に生じる歯原性嚢胞がたまたまそれらの部位に発生したとして矛盾はない。鼻歯槽嚢胞は鼻涙管上皮由来と考えられ、顎骨中にできる嚢胞ではないので除外されている。以上の理由から、いわゆる顔裂性嚢胞とされているものはすべてこ

の分類から除かれている。

石灰化歯原性嚢胞は硬組織形成を特徴とする嚢胞で、わが国では、通常嚢胞として扱われているが、WHOの分類では腫瘍の項目に入れられている腫瘍か嚢胞かの判断が難しい病変である。したがって、本疾患はこの分類に入れられていない。また、発生頻度が歯根嚢胞について第2位の術後性上顎嚢胞はわが国の分類から外すわけにはいかない⁹⁾。

この分類は、偽嚢胞として単純性骨嚢胞、脈瘤性骨嚢胞、静止性骨空洞があげられているが、脈瘤性骨嚢胞は通常の嚢胞のような骨空隙をつくらない。また、静止性骨空洞も、レントゲンの際には嚢胞様に見えるが、実際には顎下腺などの組織が陥入しているものもあるので、これら全てを偽嚢胞としていいかは疑問の残るところである。しかし、本文類は現在まで提唱されている分類に比べると、極めて単純でわかりやすいものとなっている。ただ、この分類は広く受け入れられているとはいいがたく、福島らの報告以外には、他施設からのこの分類に基づいた報告は少ない^{10,11)}。

本分類による嚢胞別の発生頻度は報告により若干異なるが、いずれにも歯根嚢胞が第1位で、約半数あるいはそれ以上を占めており、今回の検索でも49.3%であった。歯根嚢胞は一般に顎骨嚢胞の40%から60%を占めているといわれるが、三又ら¹⁰⁾は66.9%、多和ら¹²⁾は68.1%とかなり高い値を報告している。根尖病巣を組織学的に観察してみると、直径1cm以下のものの30%、1~2cmのものの60%に嚢胞形成が見られるとされているので、このような頻度の違いは、摘出物を全て病理検査に出しているかどうかによるものと思われる²⁾。慢性上顎洞炎そのものが減少傾向にあり、また、その手術適応が減少してきている今日、術後性上顎嚢胞の頻度も少なくなってきたと思われるが、今回の症例の中では20.7%と高率であった。本嚢胞の外国での報告はきわめて稀であるが、わが国ではその頻度は17%から27%とされており、本分類のほかの分類でも歯根嚢胞について第2位になっていた^{10,11)}。今までの報告では、含歯性嚢胞の頻度は10%から15%とされており、歯根嚢胞、術後性上顎嚢胞について多いものにあげられている²⁾。今回も同様で、その頻度は13.0%であった。本分類によるほかの報告でも同様の傾向が見られている。福島ら¹⁾のものでは原始性嚢胞が上位になっているが、その差はわずかで、もともと頻度はあまり多くないもので、報告により多少結果が異なるのはいたしかたないことであろう。原始性嚢胞は、本嚢胞に対する考え方が人により異なるので、その発生頻度も報告により違いがあるが、その大半を占める歯原性角化嚢胞についてみると、顎骨嚢胞の10%程度である²⁾。今回はこれに非角化嚢胞も加えているが、それでも10.8%であった。本分類を用いたほかの報告では、福島らのもの

表9 顎骨嚢胞の嚢胞別頻度

	小守ら ¹¹⁾		三又ら ¹⁰⁾		福島ら ¹⁾		本報告	
歯根嚢胞	166	(48.8%)	1287	(66.9%)	718	(60.1%)	257	(49.3%)
含歯性嚢胞	61	(17.9%)	219	(11.4%)	110	(9.2%)	68	(13.0%)
原始性嚢胞	24	(7.1%)	81	(4.2%)	129	(10.8%)	56	(10.8%)
鼻口蓋管嚢胞	9	(2.6%)	44	(2.3%)	25	(2.1%)	20	(3.8%)
術後性上顎嚢胞	73	(21.5%)	280	(14.6%)	204	(17.1%)	108	(20.7%)
単純性骨嚢胞	4	(1.2%)	5	(0.3%)	7	(0.6%)	12	(2.3%)
脈瘤性骨嚢胞	2	(0.6%)	0		1		0	
静止性骨空洞	1	(0.3%)	8	(0.4%)	0		0	
計	340		1924		1194		521	

以外ではさらに低く7.1%と4.2%であった^{10,11)}。鼻口蓋管嚢胞のわが国の発生頻度は10%以下であり、本分類での頻度も2.1-3.8%であった。原始性嚢胞、鼻口蓋管嚢胞、単純性骨嚢胞という頻度の順はほかの報告でも一致していた^{10,11)}(表9)。

顎骨嚢胞の性差については、あまりない、あるいは女性に多いとする報告もあるが、本検討では1.6:1と男性に多かった¹³⁾。これは全体の70.0%を占める歯根嚢胞と術後性上顎嚢胞の傾向を反映したものであった。三又ら¹⁰⁾によると、嚢胞全体での男女比は1.0:0.93で明らかな差はないが、歯根嚢胞以外の嚢胞ではすべて男性に多くなっている。よって、全体での差がみられなかったのは、最も頻度の多い歯根嚢胞に性差がなかったためであるとしており、そのような報告はほかにも見られる。なお、術後性上顎嚢胞については、ほとんどの報告で男性が多くなっている。われわれの結果では、頻度の最も少なかった単純性骨嚢胞以外はすべて男性に多く、以前万羽ら¹⁴⁾が報告した当科の統計とも一致していた。

年齢分布に関しては、30才代まで年齢の増加とともに増加し、その後徐々に減少していた。これは全症例の70%を占める歯根嚢胞と術後性上顎嚢胞の年齢分布を反映したものである。歯根嚢胞の分布は開発途上国では20才代、先進国では40才代にピークがあるとされているが¹⁵⁾、我々の症例はその中間であった。40才代が全体として第2位を占めたのは、術後性上顎嚢胞で40才代が多かったためである。本嚢胞は上顎洞根治術後10-20年して発生するといわれており、根治手術を20才代前半までに受けているとそのピークは30-40才代になる。岸本ら¹⁶⁾の報告では30才代が32.6%と最も高くなっているが、当科では、以前の報告でも平均年齢は42.9才で、好発年齢は40才代であった⁹⁾。本嚢胞は術後数年で発生しているともいわれており、好発年齢は症状の発現を反映しているため、新潟では症状が軽いうちは受診しない傾向があるとも考えられる。含歯性嚢胞、原始性嚢胞、単純性骨嚢胞いずれも若年者に好発するとされているが、今回の検討では、含歯性嚢胞の年齢分布は10才代と50才代にピークが見ら

れた。これは上顎前歯部に発生するものと、下顎智歯部に発生するもので好発年齢が異なっている可能性も考えられたが、10才代、50才代いずれも下顎智歯部のものが多くなっていた。鼻口蓋嚢胞の年齢分布は30-50才代とされており、今回もほぼ同様であった。

主訴に関しては、三又ら¹⁰⁾の腫脹・疼痛での全体の60%を占めていたのと同様、我々の症例でもそれが62.4%であった。これには嚢胞の発育による骨の膨隆も含まれているが、それに感染が加わって腫脹、疼痛をきたし気づく症例が多いためでもある。レントゲン検査で嚢胞の存在に気づいた無症状の症例が23.8%もあったことはこれを裏付けるもので、発育性嚢胞はもちろんのこと、歯根嚢胞のような炎症性のものでも、通常、その多くはほとんど自覚症状はないようである。したがってパノラマレントゲンの普及は顎骨嚢胞の診断には欠かせないものとなっている。病院によっては、一般開業医の撮影したレントゲンを毎年診断しているところもあり、今後このような努力も必要であろう。

発生部位では、上顎の方が下顎より2倍以上多く、上顎前歯部、上顎臼歯部、下顎臼歯部、上顎前歯部の順であった。三又ら¹⁰⁾の報告でも同様な結果である。これは、術後性上顎嚢胞や鼻口蓋管嚢胞のようにその発生が上顎に限られているものがあること以外に、歯根嚢胞の好発部位が上顎前歯部であるため、今回の検索では、歯根嚢胞の60.6%が上顎前歯部であり、その部位の嚢胞の75.0%を占めた。その原因としては上顎前歯部の根尖病巣は歯根端切除の適応となり、病理検査に提出されるものが多いことが挙げられる。上顎前歯の齲蝕の罹患率が臼歯にくらべ高いとは思われないので、上顎前歯は歯質が薄く、齲蝕に罹患すると歯髄炎になりやすいなどほかの原因があるのかもしれないが、確かではない。上顎臼歯部が第2位となっていたが、これはその部位にしか見られないわが国特有の術後性上顎嚢胞の頻度が多かったためである。含歯性嚢胞や原始性嚢胞の好発部位は、下顎智歯部から下顎枝部とされており、今回も同様の結果であった。ただ含歯性嚢胞は下顎臼歯部以外に上

顎前歯部にも多発しており, これは前歯の埋伏以外に, 埋伏過剰歯が多いためである。このような傾向は外国にはみられないわが国の特徴と言えよう。歯原性角化嚢胞の好発部位は, 下顎智歯部から下顎枝部とされており, 今回の結果も原始性嚢胞の角化嚢胞は同様な傾向を示した。しかし非角化嚢胞は明らかな好発部位が認められず, 横林⁷⁾の報告にも一致しており, いわゆる歯原性角化嚢胞とは異なる範疇のもののように思われた。

結 語

我々は, 1984年4月から94年3月までの過去10年間に新潟大学歯学部第一口腔外科を受診し, 組織学的に顎骨嚢胞と診断された521例について福島¹⁾の分類にもとづいて臨床統計的検討を行い, 次のような結果を得た。

1) 顎骨嚢胞521例の内訳は, 歯根嚢胞が257例(49.3%)と最も多く, 以下, 術後性上顎嚢胞108例(20.7%), 含歯性嚢胞68例(13.0%), 原始性嚢胞角化嚢胞32例(6.2%), 原始性嚢胞非角化嚢胞24例(4.6%), 鼻口蓋管嚢胞20例(3.8%), 単純性骨嚢胞12例(2.3%), 脈瘤性骨嚢胞0例, 静止性骨空洞0例となっていた。

2) 性別は, 男性324人, 女性197人で1.6:1と男性が多く, また単純性骨嚢胞以外のすべての嚢胞においても男性が多かった。また, 年齢分布では, 30才代が最も多かった。

3) 初診時の主訴は, 腫脹145例(28.7%), 次いで, 無症状にてレントゲン写真撮影での指摘120例(23.8%), 腫脹と疼痛101例(20.0%) 疼痛69例(13.7%), 排膿24例(4.8%), 違和感20例(4.0%)であった。

4) 嚢胞全体での発生部位率は, 上顎361例(69.3%) 下顎159例(30.7%)と, 上下顎比は2:1であった。部位別では, 上顎前歯部205例(39.4%) 上顎臼歯部156例(29.9%), 下顎臼歯部128例(24.6%), 下顎前歯部32例(6.1%)であった。

5) 福島¹⁾らの新分類は, 由来上皮が成人顎骨中に存在する嚢胞を対象とした病理組織学的分類で, 単純で分かりやすく, 顎骨嚢胞の分類にきわめて有用であると思われた。

引 用 文 献

1) 福島祥紘, 石木哲夫: 顎骨嚢胞の新分類の提唱. 歯

医学誌, 4: 50-63, 1985.

- 2) 中島民雄: 口腔領域の嚢胞. 口腔外科学, 新藤潤一, 他(編), 127-148, クインテッセンス出版 東京, 1988.
- 3) 石川悟朗: 口腔病理II, 371-414, 永末書店, 京都, 1982.
- 4) Philipsen, H. P.: Om keratogcysten(kolesteatoma)ikaebem. Tandlaegebl 60: 963-980, 1956.
- 5) Kramer I. R. H., Pindborg, J. J. and Shear M: Histological typing of odontogenic tumours. 2nd. ed. Springer-Verlag, Berlin, 1992.
- 6) Shear, M: Cysts of the oral regions. John Wright & Sons, Bristol, 1976.
- 7) 横林敏夫: 非角化性原始性嚢胞および類似顎骨嚢胞の臨床病理組織学的研究—非角化性原始性嚢胞の存在意義—. 日口外誌, 29: 1090-1106, 1984.
- 8) 大橋 靖: 唇・顎・口蓋裂患者の歯数ならびに萌出の異常と異常顎裂の部位に関する臨床統計的研究, 口科誌, 13: 401-422, 1964.
- 9) Kaneshiro, S., Nakajima, T. et al.: The postoperative maxillary cyst: report of 71 cases. J Oral Surg, 36: 191-198, 1981.
- 10) 三又康永, 野口 誠, 他: 顎骨嚢胞の臨床的検討—福島・石木の分類に基づいて—. 口科誌, 4: 147-153, 1992.
- 11) 小守 昭, 東 富雄, 他: 徳島大学歯学部口腔外科学教室における5年間の病理組織診断—III. 嚢胞病変—. 日口外誌, 32: 1431-1437, 1986.
- 12) 多和伸介, 新谷 悟, 他: 当科における過去8年間の顎骨嚢胞の統計的観察. 日口外誌, 38: 1447-1448, 1992.
- 13) 藤岡幸雄, 大橋 靖: 岩手医科大学歯学部口腔外科創設後5年間における入院患者の臨床統計学的観察. 口科誌, 20: 592-601, 1971.
- 14) 万羽晴一, 常葉信雄, 他: 最近5年間における顎口腔領域嚢胞の臨床統計的検討. 新潟歯学会誌, 4: 17-26, 1974
- 15) 岸本宏史, 斎藤寿章, 他: 術後性上顎嚢胞の臨床的研究. 日口外誌, 36: 547-552, 1990.